

書 評

原田洋一郎 著

『近世日本における鉱物資源開発の展開—その地域的背景—』

古今書院 2011年2月300頁 7,800円+税

本書は著者原田氏が筑波大学に提出した学位論文「日本における非鉄金属鉱山開発に関する歴史地理学的研究—江戸中後期を中心として—」をもとにして刊行されたものである。書名から「歴史地理学的研究」という言葉は消えているが、内容は時間と空間を考慮した歴史地理学的研究の模範ともいえる書物に仕上がっている。

時間の観点では、近世という時代において、長期的な展望のもとに従来衰退期考えられていた近世後期においても鉱山開発が多様なあり方で進められていたことを実証している。空間的には、局地的な鉱山地帯だけでなく、その周辺地域を含めて議論すべき必要性を説いて論証している。

地理学では川崎茂、歴史学では小葉田淳が鉱山史研究で著名だが、その両者を踏まえて一步前進させた研究として本書は位置付けられるであろう。フィールドワークと史料分析が入念になされており、集落景観図も美しい。

章構成は、序論（第1章）、概要（第2章）、結論（第6章）の他に、本文として次の3地域の事例研究が収められている。近隣に他の鉱山がなく、孤立して立地した小規模鉱山の事例として武蔵国秩父郡中津川（第3章）、古くから比較的多数の鉱山が集中した地域の事例として飛騨国北部地域（第4章）、そして江戸幕府直轄鉱山の事例として石見銀山（第5章）である。

まず序論での著者の見解と意欲を引用しておこう。

日本人の鉱物資源の開発の仕方について、ヨーロッパ人と比較して次のように述べている。「地域の荒廃や環境破壊を伴って資源略奪的な側面が目立つ同時代のヨーロッパ人による海外の鉱山開発や近代的な開発とは対極的なものであったといえる。ここに日本の、とりわけ近代化以前における、鉱物資源開発の注目すべき点があると私は考えている」。そして、鉱山開発といえば、ゴール

ドラッシュではないが、山あい突如として出現した鉱山町に、富を求めて多くの人が短期間に殺到するのを思い浮かべるのだが、原田は冷静になって、もっとも繁栄した時期のみに目をむけるのではなく、「鉱山業の盛期以外の時期も含めた長い時代を見据え、鉱山業によって成立した巨大な町の外側の空間にも視野を向け、従来の研究によって主に扱われてきた範囲を一步踏み出してみよう必要がある」としている。

第2章「江戸中後期における日本の非鉄金属鉱山」では、1) 明治初年における非鉄金属鉱山の稼行状況、2) 江戸中期における鉱山業の展開、の2節からなり、後者において①鉱山業への幕府・諸藩の関与の減退、②大阪の銅吹商人の活動とその意義、③鉱物需要の増大と中小規模鉱山の増加、の3項について説明がなされている。衰退期とされていた近世後期においても開発が進められていたことを示す情報が載せられている。大阪の商人がいかに詳細な情報を持っていたかは図2-3の「大坂泉屋『宝の山』」に記載された鉱山の分布図によってわかる。この図によると泉屋が稼行した鉱山は秋田県に2か所、山形県1、新潟県1、宮城県1、福島県3、栃木県1、岡山県4、山口県1、愛媛県1を数えた。

第3章「武蔵国秩父郡中津川村における小規模鉱山の開発」は、1) 中津川村における鉱山開発の展開、2) 江戸中後期の中津川村における鉱山稼行形態の変容、3) 村と鉱山開発、4) 中津川村鉱山における断続的鉱山開発の地域的背景、の4節で構成されている。

ここでは鉱山稼行形態の変容が、金山師仲間による小規模な鉱山開発から、江戸とその地廻りの商人の鉱山経営進出という経緯で語られている。技術者・労働者の確保については、出羽国、陸奥国、越後国など遠隔地からも供給されており、日本各地の鉱山間のネットワークが緊密であったことが知れる。こうした鉱山開発に関する開発主体と労働者の実情を示すだけでなく、鉱山稼行の地域的背景としての当該村の関与に迫り、百姓稼山での森林資源利用、焼畑耕作などが詳述されている点が、地域的背景を重んずる本書の特色となっ

ている。著者は鉱山の村の変容を「百姓稼山」利用をめぐる村内の階層差や村外者との関わりに目を向けて、次のようにまとめている。

「鉱山開発が盛んに行われるようになると、村と鉱山との間に争論が生じることがあった。……一部の有力な村民が、不当な利益を得ているとして、糾弾されることがあった。そこには、百姓稼山の資源に関する権利はすべて村に帰属するものであり、そこから得られた利益は村民の間で平等に分配すべきであるという、百姓稼山の利用に関する伝統的な考え方が徹底しているとみることもできるが、資源の開発によって村外から多くの利益がもたらされることが定常化する中、一方では、経済力や江戸における市場の動向についての情報を備えた村民が、それらを活用してより多くの収入を得ようとするようになり、他方では、山城や鉱山での賃金労働を通じて、小前層が有力村民の優越的な立場を否定し、自らの権利を主張することに覚醒するに至ったとみることもできよう」(75-76頁)。

第4章「江戸後期、飛騨国北部地域における鉱山業の展開」は、1) 飛騨国北部における鉱山業の盛衰、2) 江戸中後期における金山師集落の再編、3) 江戸後期の鉱山開発と在郷商人、4) 飛騨北部地域における鉱山業の再生と継続の地域的背景、の4節からなっている。

ここでは、飛騨国北部での鉱山業の盛衰が、17世紀初頭の形成期、17世紀末～18世紀初頭の衰退期、18世紀中期以降の復興期という流れで記されている。形成期での金山師の屋敷および銀山番所・銀山蔵などの施設名が記載されている検地水帳の紹介とその図化は貴重である。衰退期においては金山師の退去年と行き先が記されている資料を提示し、他の鉱山への転出者が多かったとしている。復興期については、江戸中後期における金山師集落の再編と江戸後期の鉱山開発と在郷商人について記され、さまざまな属性の住民が重層的に関与することによって鉱山業が行われていたことが強調されている。

個人的な関心から興味深かったのは、飛騨の茂住銀山で宗門下帳(1742)が残されており、その家族構成をみると、1世帯当たり2～4人の核家族が意外と多かったことである。一般的に近世後半期には核家族化が進む傾向にあるが、とくに鉱

山地帯ではその度合いが強いように感じた。他所から若手の労働者とその家族が入ってくるからであろうか。また、萬商帳を発掘し、菜種、たばこ、楮、紬などが商いされていたことが明らかにされている。(畑作)農民の複合経営を主張してきている評者にとって、鉱山住民も複合経営をしていたことを知りえたことは収穫であった。

人口移動の面で追記しておきたいのが、著者が茂住銀山集落の過去帳を分析して、1770年代から近隣の在郷町である船津町村へ移住が増加していったことを推測している。近世において数少ない人口資料である宗門改帳と過去帳を駆使した鉱山集落研究としても本章は評価されよう。

第5章「幕府直轄鉱山、石見銀山の存続とその周辺地域」は、1) 石見銀山の盛衰と銀山周辺地域、2) 銀山の衰退と江戸中後期における銀山稼行の実態、3) 銀山存続の基盤としての石見銀山御料、4) 石見銀山の存続と周辺地域、の4節からなっている。

第1節で石見銀山の興隆を交通拠点の集落に注目して論述し始めている点と、景観と地名から鉱山集落を復元しているのが地理学者ならではの切り口であろう。銀山の繁栄は、「市」や「町」の機能を強化し、あるいは遠隔地交易への対応などといった新たな機能を付与して銀山に物資や人を集めるべく再編成することとなった、としている。

第2節以降では、幕府直轄の石見銀山について、前2事例と同じく17世紀初頭に栄えていたのが17世紀後半以降に衰退していったことが示されている。その後については再興とまではいかなかったが、存続のための様々な施策がなされていたことに注目して、考察されている。その一つが大森代官所によるもので、幕府からの拝借銀などを原資として、様々な名目で銀の貸付を行い、その利銀で稼行資銀に充てられる仕方であった。その結果、銀山を中心とした地域から、製鉄などを中心とした新たな地域へと変容していったと述べている。

本章における銀山稼行の実態が詳細を極めているのは、銀山方役所の記録「安永八年御役所日記」および「文政三年正月日記」を丁寧に読破していることである。それらの内寸法稼、代官所の直轄事業の決済、など関連項目が付表として末尾

に載せられている。これらから坑道の修復が増加したこと、坑道の保守コストが上昇したこと、良鉱の減少が問題になっていたことなどがわかる。

そして、終章となる第6章の結論では、「江戸期を通じての非金属資源の継続的な開発は、複合的な生業形態を基本とした局地的な地域の構造と三都を中心とした鉱物資源集荷の広域的な構造との組み合わせからなる重層的な構造のもとに成立していたと理解される」と結ばれている。

以下において、本書を各章別にまとめつつ思い浮かんだ雑感および鉱物資源開発という本書のテーマで著者に今後の課題として期待したい点をいくつか挙げておきたい。

①序論で「対象とする鉱物を非鉄金属に一応限定した」とあるが、第5章で指摘されているように石見銀山のその後として製鉄などを中心とした地域への変容がなされたとするならば、次作では「鉄」についても全国的規模で語っていただきたいと思った。

②さらに発展させれば、今回の東日本大震災での福島原発事故により原子力依存の社会は変わらざるを得ない状況にある。その際、石油・石炭等の化石燃料に再依存する方向に向かう懸念がある。併せて電子化時代になってレアメタル獲得に世界が動き出している。これら有限な地下資源をいかに有効活用していくか、使わなくて済むような方策を立てることを含めて、提言せねばならないであろう。

③本書はあくまで江戸時代に時代を限定したものであるが、明治中期以降大資本家の鉱山開発が国家的事業として進められていくことを考えると、近代化が進んだ鉱山開発の有り様を本書の続編として期待したい。公害問題など深刻な事態を引き起こしていく鉱山開発は20世紀の環境史を語る際、避けて通れない課題であるからである。21世紀になって、世界に目を向ければ、2010年8月の南米チリの落盤事故は記憶に新しい。鉱山と事故、このテーマも歴史的に追究する必要がある。

④さて、本書の江戸時代の鉱山にもどって、事例研究の対象地であるが、秋田北部の鉱山を今後の研究に入れてほしい。稼行組織をもとにした分

類で「石見型」に対し「阿仁型」があることが紹介されており、図2-2の鉱山を持つ村の分布図をみても阿仁鉱山のある秋田県北部に多数の鉱山が存在している。また、余談になるが、評者は2008年秋にマインランド尾去沢を訪問した時から下記メモに示した鉱山労働者としての隠れキリシタンと女性の堀子が気になっている。その詳細を知りたいからである。

道路脇の看板「十和田八幡平黄金歴史キャンペーン 尾去沢鉱山開山1300年記念 黄金と自然とロマンが織りなす夢街道 ～鹿角を往く～」をむなしく眺めながら、着いたのがマインランド。「近代化産業遺産 平成19年度 経済産業省」とあるので、とにかく中に入ってみた。寂しいマインランドの坑道を1100m歩き、最後の200m(ちょんまげ坑道-慶長の道)で2つの知られざる事実に出逢った。一つは隠れキリシタン、もう一つは女性鉱婦の存在である。隠れキリシタンについて次のような解説板があった。「切支丹に対する弾圧は島原の乱[寛永14～15年](1637～1638)の後、じゅん烈の度が加えられ、諸国の切支丹宗徒はへき地の奥羽地方、ことに鉱山に潜伏した。これは山法の一つとして鉱山に認められていた治外法権的慣習が宗徒の潜伏に適していたからである」。

もう一つについて、今まで炭坑で働く人と言えば、男しか想定していなかったが、実際はかなり女性の掘り出しがあったようである。金工・掘大工・女掘子の説明板があった。女掘子人形のとに「からめ節」の看板があった。「からめる」とは、掘り出した金・銀・銅を精選する作業のことで、金山奉行が婦女子にその所作を踊らせたのがからめ節である。

本書は狭義の鉱山業・鉱山集落の研究ではなく、資源開発に関わった地域の総体の解明を目指した研究である。そして現場に立って課題を発見すること、と主張されている。評するに当たって本書の記述内容が豊富であるがゆえに、大いに触発され、上記のような余談を含めた課題を多々発見させていただいた。

(溝口常俊)